

タイトル	発話頭における言語要素の独立—Still の戦略的な使用拡張—
著者名 (所属)	岩井恵利奈 (信州大学)
連絡先 Eメール	erinaiwai72823@gmail.com
論文内容	<p>(研究の背景と目的) 発話の一要素を担っていたものが、反応詞 (response) (Biber et al. 1999: 551; Quirk et al. 1985: 628 Note) のように単独で用いられる場合がある。その語のみで (あるいはいくつかの要素がコロケーションを成して) 発話全体を担うような使用である。本研究の背景には、こうした用法がなぜ生じるのか、新たに獲得される語用論的機能は何かといった問いがある。本論文では、発話頭で譲歩標識として使用されていた英語の still が独立して (stand-alone) 使用される例に着目し、その検証を行う。最後に、分析結果や先行研究を踏まえ、独立要素ならではの働きについて考察する。</p> <p>(研究方法) 主要なデータソースとして、<i>The Corpus of Historical American English 1820-2019</i> と <i>The Corpus of American Soap Operas 2001-2012</i> を使用する。さらに、現代のアメリカドラマや CALL FRIEND English コーパス (TalkBank) からの事例も適宜使用する。質的分析 (事例の談話分析) と量的分析・統計処理を相補的に組み合わせる。</p> <p>(結果) 独立して使用される still には、4つの際立った機能が観察された。(1)再主張、(2)先取り (preemption) (相互行為上優先すべき事柄が生じたために、先手で対立的立場を表明しておく)、(3)感情表出 (悔やみ・辛さ・不満など)、(4) (自然な軌道からやや外れる) 焦点移行である。Still の独立用法は、もともと譲歩を表す発話頭 still が持っていた「後続部を投射する」、「backward contradiction を示す」、「話者の主観性 (表出的意味) を表す」といった特性が新しいコミュニケーション目的へと応用され生じた戦略的な拡張用法であり、現代英語以降の近い時代において発達してきたことがわかった。</p> <p>(考察) 日本語「でも。」にも、独立して使用される still と同じ働きを持つ事例が見られる。また、英語の so は、話者が聞き手の行為を促す (prompt) 際に用いられ (Raymond 2004)、フランス語 enfin の独立使用にも同様の働きがある (<i>Mais enfin? 'Well?'</i>) (Hansen 2005)。Enfin はさらに、苛立ち・不満・満足・安堵といった感情を表す (ibid.)。Brinton (2014) は、感嘆の <i>As if!</i> が歴史的に後期に生じた用法であることを明らかにしている。これらの知見を踏まえると、独立要素ならではの共通した働きや発達の方向性があるように思われる。この追究は今後の課題としたい。</p> <p>参考文献</p> <p>Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, Edward Finegan. 1999. <i>Longman Grammar of Spoken and Written English</i>. London: Longman.</p> <p>Brinton, Laurel J. 2014. "The Extremes of Insubordination: Exclamatory <i>as if!</i>" <i>Journal of English Linguistics</i> 42(2), 93-113.</p> <p>Hansen, Maj-Britt Mosegaard. 2005. "From Propositional Phrase to Hesitation Marker: The Semantic and Pragmatic Evolution of French <i>Enfin</i>." <i>Journal of Historical Pragmatics</i> 6(1), 37-68.</p> <p>Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. <i>A Comprehensive Grammar of the English Language</i>. London: Longman.</p> <p>Raymond, Geoffrey. 2004. "Prompting Action: The Stand-Alone "So" in Ordinary Conversation." <i>Research on Language and Social Interaction</i> 37(2). 185-218.</p>